

世界名詩集（全26巻） 5 ゲーテ 西東詩集

定価 六〇〇円

昭和四十四年十二月二十日 初版発行

訳者 井上正蔵 奥津彦重 高安国世 手塚富雄

発行者 下中邦彦 東京都千代田区四番町四番地

発行所 株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 102
振替東京 29639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

© 株式会社 平凡社 1969

0398-313050-7600

世界名詩集 5

ゲーテ

Johann Wolfgang von Goethe

西東詩集

WEST-ÖSTLICHER DIVAN

平凡社

装
幀
原

弘

西東詩集

ヨ
ハ
ン
・
ヴ
ォ
ル
フ
ガ
ン
グ
・
フ
ォ
ン
・
ゲ
ー
テ

詩人の書

移住 3

祝福のしるし 12

自由なところ 14

護符 14

四つのめぐみ 16

隠せないもの 17

要素 18

からだと命の創造 20

現象 21

ころよいもの 22

分裂 23

むかしを今に 24

歌とかたち 26

断行 27

つよくたくましく 28

宇宙のいのち 30

昇天のあこがれ 32

へ一本の…… 33

井上正蔵訳

ハーフィスの書

別名 34

告訴 36

判定 37

ドイツ人は感謝する 38

判定 30

限りなく 40

模倣 41

あきらかな秘密 43

またたき 44

ハーフィスに寄せて 45

井上正蔵訳

愛の書

典型 40

もう一組 50

読本 51

へそうだ…… 52

警告 52

耽溺 53

気がかり 54

へああ 恋人よ…… 55

はかないなぐさめ 56

満足 57

挨拶 57

あきらめ 50

避けられぬ 60

ひめぐと 61

もつとも秘められたこと 62

井上正蔵訳

観察の書

へ七絃琴が…… 64

五つのもの 65

他の五つのもの 65

へ目くばせる…… 66

へ忠告の書に…… 67

へおまえは…… 67

へ未知のひとの…… 68

へかれらは…… 69

へ本の市場は…… 70

へあんなに…… 71

へたずねるな…… 72

へわたしが…… 73

へひとり…… 73

へ注意ぶかく…… 74

へ人生は…… 75

へ人生は…… 75

〈おまえは……〉

76

〈識者の前へ……〉

77

〈気まえのいい……〉

77

〈命令の……〉

78

シャー・シエジャンと
同じ身分の方へ

79

最高のめぐみ

80

フェルドウジは言う

81

〈富とは……〉

81

ジェラルド・エディン・ルミは言う

82

スライカは言う

82

井上正蔵訳

不満の書

〈「なんじは……」

83

〈自分こそは……〉

85

〈心朗らかな……〉

86

〈なんじらは……〉

87

〈なんじが……〉

89

〈黙々と……〉

91

〈メジュヌンとは……〉

93

〈わたしがかつて……〉

94

旅人の心の静けさ

95

〈誰が……〉

96

〈自分を……〉

96

〈なんじは……〉

97

〈フランスに……〉

98

〈その昔……〉

99

予言者いわく

99

ティムールいわく

100

箴言の書

〈お守りを……〉

101

〈今日の昼……〉

101

〈最悪の日々に……〉

102

〈或ることが……〉

102

〈海はたえず……〉

102

〈なぜぼくに……〉

103

〈運命が……〉

104

〈まだ日は……〉

104

〈きみは……〉

104

〈救いも……〉

105

〈何という……〉

105

〈ぼくの……〉

106

〈純粹に……〉

106

奥津彦重訳

〈深い心と……〉

106

〈何を……〉

107

〈おろかな……〉

107

〈もし神が……〉

108

〈ぼくらは……〉

108

〈何にでも……〉

109

〈神よ……〉

109

〈嫉みが……〉

109

〈自己の……〉

110

〈ぼくの……〉

110

〈英雄を……〉

111

〈純粹に……〉

111

〈この上もなく……〉

112

〈どうして……〉

112

〈どんなときにも……〉

112

〈「なぜ真理への……」

113

〈慈善の流れで……〉

113

〈或るとき……〉

114

〈夜は暗く……〉

114

〈なんという……〉

114

〈きみらは……〉

115

〈あたりの……〉

115

〈黙っている……〉

115

一人の主人に……	116
親愛なる……	117
ほくが……	118
愚かなことだ……	119
この世に……	120
ほくの家へ……	121
主よ……	122
永久に……	123
ロークマンは……	124
東洋は……	125
なぜおまえは……	126
たとえメッカへ……	127
凝乳は……	128
悲しむことは……	129
「おまえは……」	130
よい評判は……	131
情熱の潮が……	132
きみは今まで……	133
真理が過誤に……	134
なぜこんなに……	135

高安国世訳

ティムールの書	126
冬とティムール	127
ズライカに	128
ズライカの書	130
招き	131
ズライカが……	132
あなたが……	133
ハーテムより	134
ズライカより	135
恋する男は……	136
いとおいしい……	137
ズライカより	138
ハーテムより	139
わたしは……	140
銀杏の葉	141
あなたは……	142
日はのぼる！……	143
さあ 恋しいひとよ……	144
わたしが望むものは……	145
わたしがためらいでも……	146
うつくしく……	147

高安国世訳

愛をかさね……	150
民も奴隸も……	151
貴金屬商の……	152
ハーテム	157
ズライカ	158
あなたの……	159
東洋と……	160
きみたちの……	161
日と光から……	162
わたしが……	163
ズライカの書	164
こんもり茂る……	165
水の白糸を……	166
ふたたび……	167
押韻は……	168
あなたの……	169
ズライカ	170
けだかい絵姿	172
余韻	174
ズライカ	175
再会	176
満月の夜	179

手塚富雄訳

暗号 181

反映 183

ズライカ 184

〈世界をうつす……〉 185

〈世界は……〉 186

〈千の形のなかに……〉 187

酌人の書

〈そうだ……〉 189

〈ひとりすわって……〉 190

〈コーランは……〉 190

〈酒は……〉 191

〈素面のうちは……〉 192

〈あなたは……〉 193

〈もし肉体が……〉 194

給仕に 194

酌をする少年に 195

酌をする少年は言う 195

〈世のひとは……〉 196

〈おい……〉 197

〈今朝……〉 198

井上正蔵訳

〈何という……〉 199

〈娼婦のような……〉 200

酌をする少年 202

酌をする少年 203

〈少年よ、……〉 204

〈殿さま……〉 205

夏の夜 207

〈それでやっと……〉 211

手塚富雄訳

パルゼンの書

古代ベルシャの信仰の遺訓 220

〈太陽がそれを……〉 225

高安国世訳

天国の書

予感 226

権能のある男たち 227

選ばれた女たち 231

入園の許し 232

共感 235

〈あなたの愛と……〉 237

〈あなたは……〉 242

恩寵を受けた動物 243

より、高きものといと高きもの 245

七人の睡眠者 248

お休み 253

奥津彦重訳

喩言の書

〈空から一滴の……〉 212

〈夜鶯の……〉 213

奇蹟の信仰 213

〈貝殻を抜け出た……〉 214

〈驚きと……〉 215

〈かつて或る王が……〉 216

〈金にむかつて……〉 217

〈すべての人間は……〉 218

〈天から……〉 219

こは善き哉 219

井上正蔵訳

高安国世訳

Mogami Namu

詩人の書

二十年をすごしやりわたしは
あたえられたものを味わった
まことによい一連の歲月
バルメク¹一族の時代のように

移住^{ヘッラ}

北も 西も 南も 碎^クけ
王座は裂け 国々はふるえる
移り住もう きよらかな東方で
族長の国の空気を味わおう
愛と酒と歌にひたって
キーゼ³ルの泉で若返ろう

その純朴 その正義の地で
わたしは 人類の
原始のふかみに分け入ろう

そこは ひとびとがまだ神から
天のおしえを地のことばで受け
臆測して悩むことはなかったところ

ひとびとが父祖を崇めうやまい
異教のつとめをすべて拒んだところ
認識はせまいが信念のあつい
若さの境地を楽しもう

そこで言葉が重んぜられたのは
一語一語が口伝えだったからだ

牧人の群にまじって

オアシスですがすがしくなろう

隊商とともに旅をし

肩掛けや珈琲や麝香を商い

砂漠から町々へ

道という道を歩こう

けわしい岩の道の上り下り

ハーフイスよ あなたの歌はよい慰めとなる

先導のものが驟馬の高い背から
星をよびさまし

盗賊をおどろかす歌を
恍惚として歌うとき

いろいろな浴場で さまざまの酒場で
聖なるハーフィスよ あなたを偲ほう
うつくしい娘がヴェールをかきあげ
竜涎香の捲髪が揺れて匂うとき
ああ 詩人の愛のささやきを歌って
天女たち^{フェアリー}にさえ情をおこさせよう

詩人のこのいとなみを妬^{ねた}んだり
しりぞけようなどと思うものは
まず知っておかなければならぬ
詩人のことばは天国の門にただよい
不滅のいのちを求めながら
いつも軽く扉を叩いていることを

祝福のしるし

紅玉髓こうぎよくいのターリスマン⁽¹⁾

それは信者に幸運と健康をもたらす
縞瑠璃しまろうりの地に彫じられたものは
きよめた口でくちづけせよ

刻みこまれた言葉が

アラーの名をあきらかに告げ

愛とわざに心をかりたてるとき

それはあらゆる禍わざわいをはらって

身をまもり家をまもる

わけても女はターリスマンを

ありがたく思うだろう

アムレットもおなじ護符だが

これは紙に書かれたしるし

だが宝石のように狭くないから

字がおしつめられてはいない

それで信心のあついものは

そこに長い文句をえらんでよい

男はこの紙のお護りを

信じながら肩にまといかける

しかし銘文には少しも裏の意味がない

あるがままで一切はすべて明瞭

それを身につければ屈托なく気持よく

「これこそわたしの言葉だ」と言えるもの

だが アブラクサスはめったに身につけない

その銘文はたいてい暗い妄想から作られた

奇怪きわまるものだが、それが

至上のものと思われるらしい

もし わけの分らぬことを口にしていたら

アブラクサスを身につけたものと思えばよい

印章の指輪は文字をしるすのがむずかしい

もっとも狭い余地にこの上なく高い意味

だが、そこにこそ真正なものを得る途がある

金言が彫られてあるのだ、ほとんど考えられないほどに

自由なところ

わたしは ただ自分の鞍に乗っていたい
きみたちは きみたちの小屋に 天幕にとどまるがいい
わたしは よろこんで遠方へ馬をはしらす
わたしの頭巾のうえには 星くずばかり

*

神は きみたちのために 陸と海の
導きとして星座をおいた
きみたちが いつも天空をながめて
心をなぐさめるように

タリスマン
護符

東洋は神のもの
西洋は神のもの
北の地も南の地も
神の手にやすらっている

*

ただひとりの正しいものと呼ばれる神
アラは すべてのひとに正しさを望む
百の異名をもつアラの
この呼び名こそ讀えられよ まことに

*

迷いのために わたしは混乱しそうになる
だが あなたは知っている 救いのみちを
わたしがはたらき わたしが詩をつくるとき
わたしの道に正しいゆくてを示したまえ

*

わたしが思いめぐらすのは地上のことでも
それは かならずより高いものへ到達する
こころは塵とともに四散せず
内部に集中し 天へむかってほとぼしる

*

呼吸にふたつの恵みがある
空気を吸いこむこと 空気を吐きだすこと
前者は胸をしめつけ 後者は胸をさわやかにする
このように 生はふしぎな混合